

## 調律師のお仕事

演奏前の楽器のチューニング(音合わせ)については以前少しお話ししましたね。これは、邦楽やロックバンドだって一緒です。

オーケストラの管楽器は基本的には製作時に正しい音が出るように調整してあるのですが、室温などによって微妙に変化するので、管を少し抜いて音程を調整します。合わせるのは「ラ」の音だけです。

弦楽器はどうでしょう。バイオリンなどの弦は4本ですから、4本とも合わせるのに少し時間がかかります。「ラ」の音を合わせた後、弦楽器がザワザワとやっているのはこのためです。ギターは6本、琴は13本なので、さらに時間がかかります。

オーケストラの楽器で弦が多いといえば47本の弦をもつハープ。大抵の場合、コンサートの途中には15分くらいの休憩がありますが、1部が終わり休憩中にひととおり音を合わせたハープ奏者が舞台袖に帰る頃、休憩は終わってしまいます。

実はハープより弦の多い楽器があります。それはピアノ。ピアノの弦はおよそ230本。鍵盤が80鍵なのに弦がそんなに多いのは、ひとつの音に複数の弦が割り当てら

れているからで、その音合わせは複雑。

普通、ピアニストは自分で楽器の音合わせをすることはなく、「調律師」にお願いします。我が家の古いピアノを四半世紀ぶりに調律した時には、長年ゆるんだ弦を一度に強く張るとピアノに悪影響があるということで、二度に分けてなおしました。とてもそんなこと自分ではできませんから、ピアノの音合わせには調律師の力をお借りしなければならぬのです。ご家庭にピアノをお持ちの方はきっと同様にされていることでしょう。

府中シティオーケストラで何度かピアノ協奏曲を演奏する機会がありました。ピアニストには、各々お世話になっている調律師がいらっしゃって、演奏会前には、その方にピアノの調律(音合わせ)をしていただきます。

ピアノの調律には2時間程度かかりますが、調律師はただピアノの音を合わせているだけではありません。弦の張り具合を調整して音程を合わせるのはもちろんですが、その後、鍵盤を分解して、弦を叩くハンマーに貼られたフェルトをほぐして柔らかくしたり、押し固めたりしてピアノから出る音の硬さ(柔らかさ)を調整するのです。

鍵盤の押し具合(タッチ)までもチェックする姿を見て、調律師というのはピアノそのものの「音作り」をしているんだなあと感心したことがありました。

「これで、よし」と、ひととおり音作りの終わったピアノの脇で、うなずく調律師さん。「はっ！」と気づき、道具カバンの中から黒い油性マジックを取り出し…。何ごとかと見ていると、なんとピアノ椅子の側面(客席向きの面)についた痛々しいひっかき傷をマジックで塗り始めたのです。調律師はピアノの音作りだけでなく、ピアニストの「見栄え」にまで気を遣っているんだなあと、そのお仕事の深さに感嘆したものです。